困っているのは…

あっ、思い出した！花子さんのことやね。

そうそう、地域の方が食べ物がない、足の傷がひどいと心配して相談してくれたけど、訪問したら、「困っていることはないよ。ただ、お願いするならお風呂くらいかな」と言ってたっけ。

え－、始めはそんな感じだったの？

てっきり困っていると思って訪問したけど…。全く困った感じがしなかったんだよね。

周りが心配しても、本人は困っていない、困りごとに気づいていない場合もあるのじゃ。

本人が困っていないのにどうやって支援したの？

花子さんを知ろうと何度も訪問して話を聞いたんだ。そこで「元気で猫と暮らしたい」と話してくれ、それから提案を聞いてもらえるようになったんだ。

花子さんが歩君を信頼し、自分の想いを話してもいいという気持ちになったのじゃな。

お金の面は福祉事務所、足の傷は訪問診療、入浴はデイサービス、掃除はヘルパーなど多くの人が関わり始め、少しずつ生活しやすくなったんだ。

でも、地域の方が気づいて、相談してくれなければ、大変なことになっていたかもね。

そのとおり。何もしなければ栄養失調で倒れたり、家が物であふれたりしたかもしれんのう。困りごとに早く対応ができれば、悪化も予防できるのじゃ。

よし、困っている人たちのために、これからも地域のみなさんと一緒に頑張るよ。

事例

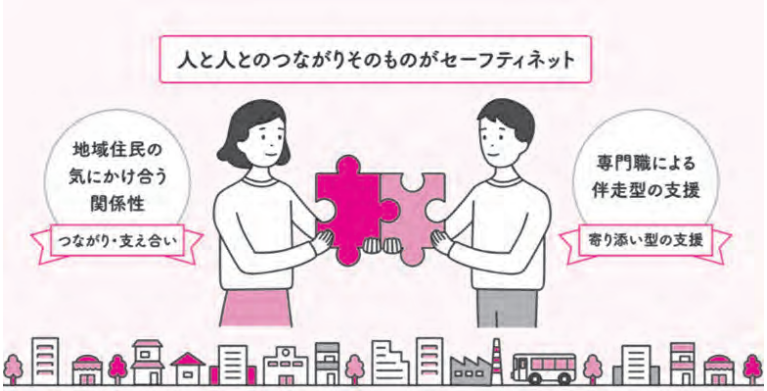
地域の方の早期の相談が困りごとの解決につながったケース

岡垣花子さん（78歳／ひとり暮らし）

地域の方から役場の地域包括支援センターに「食事ができていない、足の状態が良くないが病院に行っていない人がいるので何とかしてあげてほしい」という相談がありました。生活も困窮していたため社会福祉協議会も支援の要請を受けました。

初回の訪問は地域包括支援センターの職員と一緒に伺い、花子さんの話を聞きました。花子さんは、ひとり暮らしで近くに身内もいません。身体の機能が低下しており、お風呂に入れず、ごみ捨てもできにくくなっていました。そのため片づけができず物があふれ、猫の世話も十分にできていませんでした。足の傷もお金がないため病院に行けていませんでした。

始めは「困っていない」と言っていた花子さんですが、訪問をかさねることで「こういう生活がしたい」と話すようになり、少しずつ支援する人が増えていきました。今では自ら猫の世話をしながら一人暮らしを続けています。



町の支援体制や、相談を受ける人の思いは？

今月号の広報おかがきでは、さまざまな課題（生きづらさや困難）を抱える人への町の支援体制や、実際に相談を受ける立場の人の声が紹介されています。

私たちの町での取り組みも合わせてご覧になると、より分かりやすいと思います。ぜひ、ご覧ください。

イラスト引用元：厚生労働省ホームページ（https：//www.mhlw.go.jp/kyouseisyakiportal/#tiikikyosei）